会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和元年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」Ⅰ．教職員の資質能力向上の推進　（ⅱ）教職員研修プログラムの構築事業 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第1回学習評価研修WG |
| 開催日時 | 令和元年7月9日（火）10:00～12:00 |
| 場所 | リファレンス駅東ビル貸会議室【3F H-5】 |
| 出席者 | 委員：岡村慎一、近藤賢宏、佐伯京子、植上一希、佐藤昭宏、小田茜、事務局：飯塚正成オブザーバー：疋田、丹田（合計9名） |
| 議題等 | ○今年度の計画案（配布資料をもとに植上先生から説明）　今年度の柱として＜基礎編の精緻化・完成＞、＜学習評価研修実践編・応用編の作成＞を立てる。＜基礎編の精緻化・完成等＞・高知（龍馬学園）と岡山（岡山情報ビジネス専門学校）で研修予定。・研修結果を基に9・10月に基礎編プログラム完成・印刷予定。・基礎編の改訂は、実践的な実習や専門学校独自の基礎的知識については基礎編の内容に加える必要がある。＜学習評価研修実践編・応用編の作成＞・学習評価研修基礎編の受講者を対象に具体的な場面を想定した研修を複数開発。・開発の流れとして対象校のニーズに沿いながら実施。・カリキュラムの開発のための調査を年間9回程度実施予定。・11～12月に検証研修を行う。・1〜2月に応用編のプログラム完成・印刷。○説明を踏まえた意見交換　＜基礎編＞・時間の配分について検討する必要がある。・今年度の基礎編の改訂と指導書を作成する。・研修自体の評価は、こちら側が立てた目標に沿った形で評価。・研修の時間内で振り返りの作業を入れる（ルーブリック等）。・研修で得た知識を基にどのように今後つなげていくのかについて書いてもらい（シート）、共有する。・高知にて改訂版を実施。・研修成果はWGで共有。・講師養成と研修自体の評価をどう考えていくのかも課題。・全専研しだではあるが講師養成に関するプログラムは来年度以降開発も検討。・各専門学校に置けるといいが現状は困難である。・専門学校教員が自身の教員経験を参考にしながら研修を実施できるような広がりを持つことが望ましい。・指導書は、学校教員用の教科書を作成するイメージ。・現在のテキストに付随する形（解説書）で作成。・テキストだけで研修を実施できるようにするのか、pptの作成も想定したものを作成する。・印刷物を作ると同時にpptも共有。＜実践編・応用編＞・汎用性については、より多くの教員に理解してもらうための事例を準備。・国家資格取得とそれに伴う評価等、分野の特性を踏まえた上での事例が必要ではないか。・国家資格取得のための知識と現場知識の兼ね合い・乖離・矛盾、産業構造を踏まえる必要がある。・段階的に形成的評価（最終的に総括的評価）をしながらつなげていく流れを作りたいものの、この評価ができる専門学校教員が少ない（価値づけを問う、そもそも価値づけをしているのか）。技能に関してはこの流れで実施できる。・象徴的な実習を複数動画撮影し、共有・分析（分解し、言語化・価値づけを行う）後、観点を打ち出す。他方、研修に落とす場合、講師側の前提知識・蓄積が必要になる。悪い事例を説明した上でグッドプラクティスの説明を行う形であれば実施できるのでは。・積み重ねの意識。形成的評価と総括的評価が大事。それは分野で限定をかけるものではなく、ある程度汎用的なものにする。・頂点をどこに置いているのか、中間点はどこなのか、その中間点はどのような考えから置いているのかを言語化してもらい、比較しながら考えてもらうと標準化できる。・汎用性を意識したワークを行う（調査校に規定されないワークを実施する）。・職業実践専門課程等を踏まえた事業であるため、学校以外の関係者との連携・関係づくりを考えたインターンシップを見ていく必要があり、このエッセンスを研修に入れる必要がある。＜調査等＞・そもそも昨年度の学校・学科の継続調査をするのか・KBC（irc）については昨年度同様にインターンシップを軸に調査。・負担等を踏まえて麻生とYICは同じ学科（美容等）を調査するのはどうか。・同じ学科でも、ブレイクダウンの仕方、スクリプトの書き方の違いなどを素材にしながら、先生の分解の仕方を題材にしていくというほうが，先生たちの問題関心に沿う。・絞り込むにあたってテーマではなく、分野で絞り込むのは危険（分野で絞り込みすぎると理解が難しくなる可能性がある。）標準化のためのモデル事業としてある程度のボリューム（教員数等）を考える必要がある。・インターンシップについても様々な事例を見ていかなければ様子を掴めない（情報量が足りていない）。現状は特定的になりすぎている。・「評価を踏まえてどのような実習を設定したのか」というのを導入の問いにすれば多分野でも共有しやすいのでは。・インターンシップも分野ごとにカテゴリ分けはできる（頂点・ゴールの置き方で分類できる）。それを元に研修を作っていくことは可能。技能取得に関する評価についても汎用性を高めながら、対象を少し絞る形で作成する（限定をかけつつも横で展開できるような）。・分野によって、同じ「インターンシップ」という言葉を使っていても内実は全く異なる。インターンの仕方も分野によって幅がある。・前提として様々な形のインターシップがあるなかで、企業連携が密にされている事例を見ていくことを導入で共有する。＜研修の対象者の設定の仕方＞・教員が普通の授業で実践できる。 ・ 学科主任などがカリキュラムマップをつくる、という規模なのか，現場の教員が行うのか、という点でも距離がある。 ・全体のマップを意識しながら研修をする。 ・見失ってはいけないのは、現場の先生に評価を意識してもらうこと。そのあたりを大事にしながら整理する必要がある。先生方が普段やっているインターンなどをより言語化できるように。 〇全体スケジュール・事業推進会議が年4回（東京）・学習評価WGが年7回（博多）・講座の実施は基礎編が2回（高知、岡山）、応用編が3回（沖縄、福岡、山口）。○日程調整・次回委員会日程は8月19日（月）10時〜（博多）議題は基礎編プログラム再作成。・基礎編は8月に実施する高知・岡山の研修の成果を踏まえて9月の下旬までにリライト：委員会日程9月24日（火）14時〜17時・応用編については9月24日（火）までにラフ案を作成する（ここまでにKBCは2回ほど調査予定）。・9月24日（火）を踏まえて応用編の修正と研修の具体案について会議：委員会日程10月28日（月）10時〜13時・YICは12月24日（火）、麻生は12月18日（水）、KBCは11月22日（金）に応用編プロトタイプ実施予定・応用編リライト：1月20日（月）16時〜17時 |

以上